

〈研究ノート〉

## スタイン中央アジア探検と日中共同隊

小島 康誉

この小文の目的は、中央アジア探検史に燦然と輝くマーク・オーレル・スタイン (Marc Aurel Stein 1862～1943) の四次にわたる中国新疆を中心とした中央アジア探検と日中共同で展開された世界的文化遺産の保護研究事業を簡述し、時代背景との関連性の中で、文化財保護と国際協力の重要性を展望することにある。

ハンガリー生まれで後にイギリスに帰化(1904)したスタインは、英領インド帝国ラホールに赴任中、スウェーデンの地理学者スヴェン・ヘディン  
の新疆タクラマカン沙漠でのダンダンウイリク遺跡発見(1896)に刺激を受け、中央アジア探検を開始した。

第一次探検(1900～01)では、ダンダンウイリク・ニヤ・エンデレ・ダマ  
ゴウ・ラワック各遺跡で大規模発掘を行い、大量の文物を収集した。第二次探検(1906～08)では、ニヤ・エンデレ・楼蘭・ミーラン各遺跡で大規模  
発掘するとともに、敦煌莫高窟での「購入品」を含めて大量の文物を獲得した。甘州なども調査した。崑崙山脈を踏査中に凍傷にかかり、右足指二  
本を切断した。第三次探検(1913～16)でも、ニヤ遺跡での大規模発掘と敦煌莫高窟での「購入」を通じて大量の文物を入手した。甘州・モンゴル・  
パミール高原なども調査した。第四次探検(1930～31)では、中華民国政府の調査禁止と「遊歴護照」(旅行ビザ)取り消し即時出国命令をくぐり、新  
疆省政府の監視員の目をかすめニヤ遺跡を「発掘」し多数の文物を収集した。追放に近いかたちの屈辱的敗北であった。

スタインのこれら探検を横断的に記す。きっかけは前述したようにヘ  
ディンによるダンダンウイリク遺跡発見である。大英帝国と英領インド帝  
国の全面的支援により行われた。資金は英領インド帝国・大英博物館・米

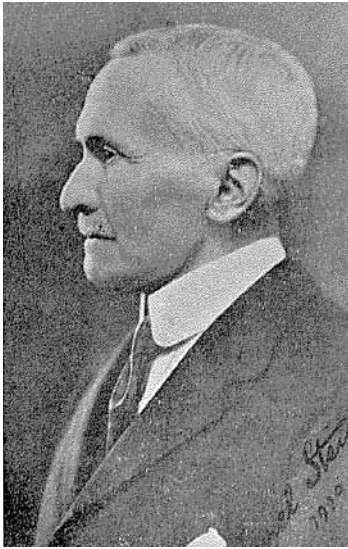


図1 マーク・オーレル・スタイン(1929)  
第二次中央アジア探検報告書SERINDIA  
(復刻版)カバーより転載

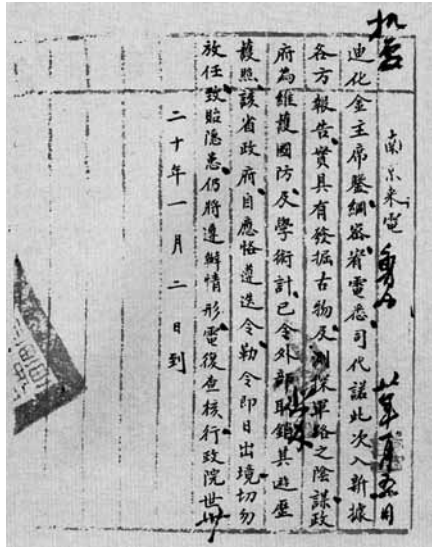


図2 中華民国行政院から新疆省主席への「古物発掘および軍路測量の陰謀…」ビザ取り消し、即日出国命令」密電 『近代外国探検家新疆考古档案史料』より転載

ハーバード大学などが負担した。その中より報酬も得た。遺跡の所在する中国側と調査協議書は交わしていない。目的は文物の収集とその研究であった。文物収集目的での大規模な発掘を行った。結果的に各遺跡は甚大な破壊を受けた。駐新疆カシュガル大英帝国領事館を前進基地とした。調査はスタイン一人で行った。随行したのはインド帝国の測量員や通訳・案内人・荷駄隊などであり、欧米の研究者は同行しなかった(第四次では壁画移し取り技術をもつアメリカの地質学者も参加したが病気で実質調査開始前に帰国した)。帝国主義時代の収奪文化により大量の文物をインドと大英帝国に持ち出した。それらをスタインおよび他の研究者が研究し大部の報告書を出版した。随行したインド帝国の測量員により都市や道路の詳細な地図が多数作成され、それらは軍事的価値を有していた。英露両国を主とした中央アジアの領土争奪「謀報戦」(いわゆるグレートゲーム)の先兵の役割を果たした。これらにより、スタインは戦争に勝利した將軍のよ

うに文化財方面の英雄となり、英領インド帝国の名誉称号 C.I.E と K.C.I.E を得た。またイギリスへの帰化を後押しした。

スタインには二重基準があった。敦煌莫高窟で仏像などの持ち出しはさけたが、収蔵されている仏典類は持ち出した。あるいは外国探検隊が壁画を切り取ったキジル千仏洞では破壊がひどいと日記に書いているが、上述した各遺跡では大規模発掘を行い、遺跡を破壊している。

日中共同による文化財保護研究事業は筆者が新疆クチャ郊外のキジル千仏洞を参観した時(1986)に始まった。日本の大谷探検隊やドイツ・ロシア・フランスなどの探検隊による壁画などの持ち出し、往時の現地人による金箔剥がし、異教徒による破壊、そして長年の自然崩壊により荒廃していた。「人類共通の文化遺産」と直感し保護しなければと個人寄付を申し出た。新疆での外国人からのあらゆる方面での初の寄付申し出で、半信半疑、別の目的があるのではと、許可がなかなか得られなかった。外国からの寄付は本格的修復のきっかけとなった。筆者はそれなら個人寄付では足りないから、日本で浄財を募り1億円を寄付すると提案した。当時の中国の物価などを考えると、現在の1億人民元(約19億円)にも匹敵する巨費である。「日中友好キジル千仏洞修復保存協力会」を設立(1987)、多くの方々の協力をえて、工事用車両をふくむ1億円余を新疆ウイグル自治区文化庁へ贈呈した(1988～89)。この寄付と中国側の努力でキジル千仏洞はよみがえった。

日中共同ニヤ遺跡学術調査は九次(1988～1997)にわたって現地調査を敢行した。キジル千仏洞修復保存協力の過程で、「新疆には重要遺跡としてキジル・楼蘭・ニヤがある。キジルは修復中、楼蘭は基本調査終了だが、ニヤの本格調査は行われていない」と聞き調査を提案した。この時も許可は中々下りなかった。スタイン第四次探検から50年余りしか経っておらず、外国人による調査には強烈な拒否反応があった。広大な遺跡全体を調査し、各種遺構約250カ所を登録、遺構分布図作成、住居址・寺院址・墓地などを測量・発掘し、国宝級文物多数を検出するなど多大な成果を上げた。

日中共同ダンダンウイリク遺跡学術調査は四次(2002～06)にわたって現

地調査を敢行した。ニヤ調査の関連調査として行った。遺跡全体を調査し、各種遺構約70ヵ所を登録、遺構分布図作成、住居址・寺院址などを測量・発掘し、国宝級文物多数を検出するなど大きな成果を上げた。検出した壁画の保護も実施した。

日中共同による活動を横断的に記す。きっかけは前述したようにキジル千仏洞を「人類共通の文化遺産」と直感し保存しなければとの修復保存協力申し出を中国側が受け入れたことである。ニヤとダンダンウイリク遺跡調査の主催団体は、日本側は佛教大学内ニヤ遺跡学術研究機構であり、中国側は新疆ウイグル自治区文化庁と後に分離された新疆ウイグル自治区文物局である。日本国の全面的支援は受けていない。資金は文部科学省研究助成や佛教大学・中国政府助成を得ているが、殆どは筆者の負担である。活動毎に中国側と正式協議書を交わしている。目的は世界的文化遺産の保存・研究である。発掘は破壊につながると考え、極力控えた。発掘する場合も中国国家文物局の書類による許可を得た。文物の収集も地表散布遺物を基本とした。ウルムチの新疆文物考古研究所を前進基地として調査を行った。

日中双方の多くの研究機関の文化財管理・国際協力・考古学・仏教学・西域文献学・東西交渉史・建築学・地理学・地質学・木質科学・仏教美術史・染織学・文化財保護・模写・撮影・測量などの研究者や技術者が参加した。測量や荷駄隊・調理人などに地元補助員を雇用した。収集した文物



図3 日中共同ニヤ遺跡学術調査隊(1993) 中国側隊員撮影

はすべて新疆文物考古研究所に収蔵し一切日本へ持ち出していない。隊員の研究による大部の報告書を数巻出版するとともに、佛教大学・北京大学・ウルムチで度々国際シンポジウムや文物展を開催し公開した。大英図書館でのヘディンとスタインに関する国際フォーラムや北京フォーラムなどでも発表し続けている。研究は今も続いている。報告書は今後刊行予定である。遺跡では詳細な測量を実施したが、都市や道路の地図は作成していない。

これらの調査保存研究事業の関連として、次のような事業を展開した。文化遺産の調査・保存・研究・継承を实践する人材を鼓舞するために新疆小島文化文物優秀賞提供、経済急発展の一方で進む破壊を止め文化遺産保護意識を啓蒙するために中国歴史文化遺産保護網運営、閲覧しにくい史料を研究者に提供するために歴史档案史料の共同出版、ほかにも新疆大学小島奨学金提供、小学校建設、児童就学育英金提供、博物館建設、各種寄付、各種代表团招聘と派遣、各種仲介などを行っている。

以上のようにスタイン中央アジア探検と日中共同での世界的文化遺産保存研究事業にはその時代背景が大きく関わっている。

スタイン中央アジア探検は清朝衰退・滅亡期から中華民国創成期・国民党と共産党結成から国共内戦といった混乱期にあつて、弱体化した中国に対して列強によって繰り返された領土侵略戦、そしてその一環としての英露を主とした新疆「領土争奪」諜報戦と密接な関連をもって行われた探検を代表するものである。

日中共同による世界的文化遺産保護研究事業は国共内戦に勝利した中国



図4 中国国家文物局発掘許可証

共産党による中華人民共和国が成立し、大躍進時代、文化革命時代をへて改革開放政策が開始されたなかでの活動である。文化財の研究保存のみならず人材育成や相互理解促進にも取り組んだ。国際協力の一例である。

文化遺産は保存しなければならない。環境や資源の保護同様に重要であり人類の保護につながる。文化財は現地で保存されるのが最善であるが現実には困難な一面もある。現地に残された文化財が破壊され盗掘され散逸した例は世界中にある。現地に残された文化財がいつの間にか散逸し、持ち出された文化財が保存され研究に公開されているという皮肉な矛盾もある。2010年、カイロで中国・エジプト・ギリシャ・イタリアなど約20カ国により「不法に持ち出した古代遺跡の文化財を返せ」と国際会議が開かれた。

21世紀は国際協力の世紀とも言われている。しかし現実には各国の国益は異なり、今も世界各地で戦争や紛争が多発している。民族・宗教・人権・領土問題も頻発している。相互理解は困難、だからこそ相互理解の努力が重要である。そこに国際協力の意義がある。

国際協力は平和を維持し戦争を抑止する重要活動である。文化財保護研究方面での国際協力もその一部である。スタインが1915年と31年に訪れ、筆者が1986年から修復保存に協力してきたキジル千仏洞をふくむ「シルクロード：長安－天山回廊の交易路網」は、2014年6月22日、カタールのドーハで開催された第38回ユネスコ世界遺産委員会により「世界文化遺産」に登録された。ニヤ遺跡も当初計画に入っていたが、計画規模が縮小され申請された。次段階での追加登録が期待されている。

#### キーワード：スタイン探検、日中共同、文化財保護

#### 〈付記〉

本稿は『「シルクロード：長安－天山回廊の交易路網」世界遺産登録記念 キシル・ニヤ・ダンダンウイリク』（英文、小島康誉編、出版社未定、2015年春刊行予定）掲載の「Stein's Expedition to Central Asia and the Sino-Japanese team」の日本語訳である。

〈主な参考文献〉

- M. Aurel Stein., *ANCIENT KHOTAN* (Cosmo Publications 1981・初版Oxford University 1907)
- M. Aurel Stein., *SERINDIA* (Motilal Banarsidass 1980・初版Oxford University 1921)
- M. Aurel Stein., *INNERMOST ASIA* (Cosmo Publications 1981・初版Oxford University 1928)
- 日中友好キジル千仏洞修復保存協力会「キジル千仏洞修復保存募金中間報告」1988、「最終報告」1989
- 日中共同ニヤ遺跡学術調査隊編『日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第1巻)法蔵館1996、(第2巻)中村印刷 1999、(第3巻)真陽社2007
- 新疆ウイグル自治区档案馆・佛教大学ニヤ遺跡学術研究機構編『近代外国探検家新疆考古档案史料』新疆美術摄影出版社2001
- 新疆ウイグル自治区档案馆・佛教大学ニヤ遺跡学術研究機構編『スタイン第四次新疆探検档案史料』新疆美術摄影出版社2007
- 日中共同ダングンウイリク遺跡学術調査隊編『日中共同ダングンウイリク遺跡学術調査報告書』真陽社2007
- 小島康誉『新疆での世界的文化遺産保護研究事業と国際協力の意義』佛教大学宗教文化ミュージアム2013
- 小島康誉「スタイン第四次新疆探検とその顛末」『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』第10号2014